

創世記25-26章 「イサクの相続」

1A アブラハムからの相続 25

1B ケトラからの子ら 1-11

2B イシュマエルの生涯 12-18

3B イサクの弟息子への約束 19-34

2A 約束の地に留まるイサク 26

1B ペリシテ人の地での寄留 1-11

1C 約束の地での祝福 1-5

2C 父の失敗と神の守り 6-11

2B 井戸の争い 12-33

1C 祝福への妬み 12-16

2C 主への信頼と忍耐 17-25

3C 誓いの井戸 26-33

3B 俗悪エサウの悩みの種 34-35

本文

創世記 25 章を開いてください。私たちはついに、アブラハムからイサクに、約束が受け継がれていくところを今日は読んでいきます。そして、さっそくイサクの後に受け継ぐ息子ヤコブも登場です。

1A アブラハムからの相続 25

1B ケトラからの子ら 1-11

¹ アブラハムは、再び妻を迎えた。その名はケトラといった。² 彼女はアブラハムに、ジムラン、ヨクシャン、メダン、ミディアン、イシュバク、シュアハを産んだ。³ ヨクシャンはシェバとデダンを生んだ。デダンの子孫は、アッシュル人とレトシム人とレウミム人であった。⁴ ミディアンの子は、エファ、エフェル、ハノク、アビダ、エルダアで、これらはみな、ケトラの子であった。

アブラハムが妻を迎えたということですが、これは、イサクがリベカを妻に迎えた後であろう話です。これは驚くべきことです。彼はすでに 140 歳以上になっているはずですが。しかし、主は彼に生殖能力をお与えになっただと思われまます。なぜなら、彼には、主からの約束がありました。「17:6 わたしは、あなたをますます子孫に富ませ、あなたをいくつもの国民とする。王たちが、あなたから出てくるだろう。」

そして生まれてきた子たちですが、ここに出て来ているのは、今のアラビア半島とヨルダン南部に住む人々です。最も有名なものが、ミディアンです。ミディアンは、モーセの舅になるイテロがミディ

アン人です。後に、モアブの草原に宿営していたイスラエル人たちに、娘たちを送り込んでいるのも、ミディアン人です。士師の時代、ギデオンたちが戦うのもミディアン人です。

そして、シュアハという子もいますが、ヨブ記に、ヨブの友人の一人が、「シュアハ人ビルダデ(2:21)」が登場します。

そして、ヨクシャンの息子シェバとデダンですが、創世記 10 章にハムの子孫としてシェバとデダンがありました。ハム系のこれらの人々が住んでいるところに、おそらく、ヨクシャンの息子たちが移り住み、ハム系の人々に代わって、セム系の彼らが住むようになったのではないかと想像します。聖書では、有名なのはシェバの女王ですね。そして、エゼキエル書で、シェバとデダンが、マゴグのイスラエル侵略に、おかしいではないかと声を挙げます。

⁵ アブラハムは自分の全財産をイサクに与えた。⁶ しかし、側女たちの子には贈り物を与え、自分が生きている間に、彼らを東の方、東方の国に行かせて、自分の子イサクから遠ざけた。

アブラハムは、多くの子に恵まれ、それぞれが民となっていくのですが、しかし、ここが大事で、イシュマエルに対して彼がそうしたように、イサクのみに自分の全財産を与え、他は、贈り物だけ与えて、東方の国に行かせました。ケトラについて 1 節には「妻」とありますが、サラのような正妻ではなく、側女と同じでした。それで、イサクから遠ざけたのです。約束の子のみが、約束を受け継ぐことができるのであり、その他の子たちは受け継ぐことができないからです。

ここから私たちが、御霊によって生まれなければ決して神の国は受け継ぐことはできないことが分かります。肉なる者、生まれつきのままでは、受け継ぐことができないのです。たとえ、自分の家族がクリスチャンでも、自分自身が信じて、新しく生まれなければ、神の相続人にはなれません。

⁷ 以上がアブラハムの生きた年月で、百七十五年であった。⁸ アブラハムは幸せな晩年を過ごし、年老いて満ち足り、息絶えて死んだ。そして自分の民に加えられた。

175 歳です。イサクが産まれた時が 100 歳、彼がリベカを妻にするのは 40 歳で、彼が 140 歳の時だと分かります。そして、エサウとヤコブが生まれる時、イサクは 60 歳だったので、アブラハムは 160 歳で、まだ生きていました。そして彼は幸せな晩年を迎えたということで、確かに神が彼を祝福するという約束は、その通りになりました。

「そして自分の民に加えられた」という、興味深い表現があります。これが、イスラエルの民というよりも、天にある、神の民全体のことを言っているのではないかと思います。アブラハムが、イスラエルの民の父祖ですから、その前にイスラエルの民はいないからです。天に属する神の民があ

り、その中に加えられました。(参照:ヘブル 12:22-24)

⁹ その息子、イサクとイシュマエルは、アブラハムを、マムレに面するマクペラの洞穴に葬った。これは、ヒッタイト人ツォハルの子エフロン¹⁰の畑地にある。アブラハムがヒッタイト人たちから買ったあの畑地である。アブラハムと彼の妻サラはそこに葬られた。

イシュマエルが、アブラハムの葬儀にやってきました。彼は家から追放された身ではありますが、父の葬儀には参列し、イサクと肩を並べています。そして、アブラハムは、彼自身がサラのためにエフロンから購入した土地に、葬られました。

¹¹ アブラハムの死後、神は彼の子イサクを祝福された。イサクはベエル・ラハイ・ロイの近くに住んだ。

ついに、ここからイサクの生涯が始まります。ここで大事なものは、「受け継ぎ」です。主が、確かに、イサクに約束を受け継がせておられるということです。その祝福が、イサクに留まっています。26章で、彼がいかに祝福されたかを見ていきます。

私たちの主、キリストは神の相続者です。「ヘブル 1:2b 神は御子を万物の相続者と定め、御子によって世界を造られました。」そして、私たちは、キリストにあって神の相続者となっています。「ガラ3:29 あなたがたがキリストのものであれば、アブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。」ですから、イサクの生涯から、私たちがキリストにあって神から相続する、ということをおぼろげに学ぶことができます。

そして、「ベエル・ラハイ・ロイ」ですが、ベエル・シェバよりもさらに南、ネゲブにあると思われます。カデシュ・バルネアにまで南下する途中であると言われていました。

2B イシュマエルの生涯 12-18

このイサクの歴史に入る前に、創世記の著者モーセは、イシュマエルの系図を書き記します。

¹² これは、サラの女奴隷、エジプト人 ハガルがアブラハムに産んだ、アブラハムの子イシュマエルの歴史である。¹³ イシュマエルの子は、生まれた順に名を挙げると、イシュマエルの長子ネバヨテ、それからケダル、アデベエル、ミブサム、¹⁴ ミシュマ、ドマ、マサ、¹⁵ ハダド、テマ、エトル、ナフィシュ、ケデマである。¹⁶ これがイシュマエルの子孫である。これらは、集落と宿営ごとにつけられた彼らの名で、十二人の、それぞれの氏族の長である。

イシュマエルについて、主は祝福するという約束を与えられたことを思い出してください。「17:20

イシュマエルについては、あなたの言うことを聞き入れた。必ず、わたしは彼を祝福し、子孫に富ませ、大いに増やす。彼は十二人の族長たちを生む。わたしは彼を大いなる国民とする。」主は、アブラハムを祝福し、彼が祝福となるという約束を与えられました。ゆえに、アブラハムから出てきたという理由だけで、イシュマエルも祝福され、十二の族長を生み出すようにしてください。そして事実、ここで十二人が生まれます。大いなる国民となると言われていますが、彼らが、今のアラブ人の始まりだと言われています。

¹⁷ 以上がイシュマエルの生涯で、その年数は百三十七年であった。彼は息絶えて死に、自分の民に加えられた。

イシュマエルも、天にある神の民に加えられた、アブラハムと同じところに行った、ということが分かります。思えば、主は、彼の声を聞いてくださり、それでイシュマエルという名を与えられました。ハガルがサラから逃げた時も、アブラハムがイシュマエルと共にハガルを追い出した時も同じです。イシュマエルには、彼なりの信仰を持っていたことが分かります。

新約聖書には、アブラハムにあって慰めを得ている人々が、陰府において「アブラハムの懐」に入れられていることが、うかがい知れます。金持ちとラザロの話の時です(ルカ 16:22)。アブラハムに対する祝福の約束にしたがって、慰めを受け、そしてキリストが死なれて、よみがえられる時に、エペソ 4 章によると、下にいた聖徒たちも連れていかれたと考えられます(8-10 節参照)。

¹⁸ イシュマエルの子孫は、ハビラからシュルまでの地域に住んだ。シュルはエジプトに接し、アッシェルへの道にあった。彼らは、すべての兄弟たちに敵対していた。

ハビラは、創世記 2 章で、エデンの園から流れる川の一つが、「ハビラの全土を流れていた(11 節)」とありました。エジプト北部に広がっている地域だと思われます。そしてシュルが、エジプトからイスラエルへ行く、地中海沿いの地域です。その辺りには、今も遊牧民、ベドウィンがいて、私たちもエジプトに旅行に行った時に見ました。

そして、シュルですが、そこからアッシェル、後のアッシリアのところまで道がありましたが、ローマ時代には「海沿いの道(ヴィア・マリス)」と呼ばれ、エジプト文明とメソポタミア文明の地域を結ぶ、国際幹線道路になります。

そして、「彼らは、すべての兄弟たちに敵対していた」というのも、主がアブラハムに言われていたことで、実現しています(16:12)。アラブ人の中には部族主義が発達し、互いに抗争を繰り返しています。主が言われることは、ことごとくその通りになるということです。

3B イサクの弟息子への約束 19-34

¹⁹これはアブラハムの子イサクの歴史である。アブラハムはイサクを生んだ。

ここの「歴史」という言葉が、創世記にはずっと続いています。天と地が造られた「経緯」という言葉から始まり、アダムの歴史、ノアの歴史、というように続きました。ここからがイサクの歴史です。

²⁰イサクが、パダン・アラムのアラム人ベトエルの娘で、アラム人ラバンの妹であるリベカを妻に迎えたときは、四十歳であった。²¹イサクは、自分の妻のために主に祈った。彼女が不妊の女だったからである。主は彼の祈りを聞き入れ、妻リベカは身ごもった。

アブラハムとイサクは、似たような生涯をたどります。サラが不妊だったように、リベカも不妊でした。聖書では、ヤコブのラケルも子がなかなか生まれず、ヨセフが生まれました。また、ずっと後に、ハンナも不妊でしたが、サムエルが生まれました。そして、バプテスマのヨセフの母、エリサベツも不妊でした。主は、不妊の女の胎を開かれる方です。

そして神のなされた、もっと大きなしるしは、不妊ではなく、処女にキリストを身ごもらせたということです。死んだような胎にいのちをもたらす方は、ないところにあるようにされる、聖霊による懐妊をお与えになりました。

ところで、イサクがリベカを妻にしたのが 40 歳で、26 節を見ますと、息子たちが生まれたのが 60 歳です。つまり、結婚してから 20 年が経っていて、それでイサクが祈ったということです。祈り始めるには、ずいぶんかかったなあという感じがします。

イサクという人は、面白いです。リベカが故郷を離れて、イサクのところに到着した時、彼は、その一隊を見ても、走って駆け付けることなく、歩いているだけでした。「24:63 イサクは夕暮れ近く、野に散歩に出かけた。彼が目を見て見ると、ちょうど、らくだが近づいて来ていた。」とありますが、続けて普通に歩いていたようです。

彼を見ると、ちょうど親がクリスチャンの、二世以上の人々が共感できるような人ではないか？と思います。主がなされることなのだ、として、主に頼り切っているということです。「必死で、祈って、必至に主にしがみついていないと、世の欲に巻き込まれる」という焦りがないような人です。主がおられるのに、なんで、そんな焦っているの？と不思議がるような感じの人ではないかと思います。親が主を信じて生きていて、確かに、主が真実を示してくださるので、その安心の中に憩っているのではないかと思います。

しかし、主は、祈りによって、熱心な願い求めによって、ご自身のわざに関わってほしいと願って

おられます。確かに、主がしてくださり、そこに憩うことは大事です。けれども、主は、熱心に求めることによって、その願いをかなえることによって、ご自分の事を行いたいと願われています。それで、イサクが願い求めるまで、リベカを不妊のままにしておられたのではないか？と思います。イエスは言われました、「ルカ 11:9 ですから、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。」

²² 子どもたちが彼女の腹の中でぶつかり合うようになったので、彼女は「こんなことでは、いったいどうなるのでしょうか、私は」と言った。そして、主のみこころを求めに出て行った。

これは、お母さんの方々、リベカの気持ち分かるのではないのでしょうか？お腹の赤ちゃんが動いた、という話はよく聞きますね。けれども、双子で、その双子がぶつかり合うようになるなんて、信じられません。兄弟が喧嘩するのは、もちろん生まれた後のことです。生まれる前から争っているなんて、衝撃です。

そこでリベカは、正しいことを行いました。みこころを求めて出て行きました。天幕を離れて、独りのところで、独りで祈ったのでしょうか。

²³ すると主は彼女に言われた。「二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれ出る。一つの国民は、もう一つの国民より強く、兄が弟に仕える。」

驚きの主のご発言です。まず、双子は、二つの国、二つの民になるということです。これは、アブラハムに与えられた、多くの国民が出てくるという約束の延長ですから、それほど驚きではなかったかと思います。

けれども、普通、兄が長子の権利を得て、父のものを受け継ぎますが、そうではなく、弟が強くなります。そして、最後は兄が弟に仕えるようになる、ということです。これが驚きです。でも、考えてみれば、イサク自身も弟だったのに、約束はイサクに受け継がれました。事は、肉によるのではなく、約束に基づくということは、イサク自身が良く分かっていました。その延長でしょうか、弟が、自然に反して、神からの約束を受け継ぐということなのです。

ただ、この場合は、弟が兄から奪うような形で、争うような形で受け継いでいくということでしょう。それが、なんと母の胎にいる時から起こっている、という事実であります。

これから私たちは、イサクの生涯と共に、ヤコブの生涯を見ていくこととなります。そこで、みなさんも戸惑うでしょう、彼は、先々の事を考えて、前もって準備して、それで獲得していくということをやらずと、行っていきます。そして、相手の持っているものを、結果として奪い取っていくようなこと

をしていきます。けれども、そこでヤコブ自身も、騙されたり、大変な苦勞をすることになります。この中に、神はおられるのか？と思うような戸惑いを感じるでしょう。

そこで覚えていただきたいのは、「神の言われたことは、その通りになる」ということです。つまり、弟が強くなり、兄が弟に仕えるようになるということ。また、マラキが預言したように、ヤコブは愛されていて、兄エサウは退かれるということ。ヤコブが何をしたかに関わらず、主は、彼を祝福し、彼に約束を実現させていかれることです。彼が、自分の力で獲得していくことについては、彼が結果を刈り取る場面も数多く出てきます。それでも、主はヤコブを見捨てず、彼に大いなる祝福を与えられるのです。

これが、午前礼拝で学んだ、「神の愛による、神の憐れみによる選び」です。私たちは、神の恵みによって、信仰を通して救われました。それを、神は、永遠の昔から決めておられ、私たちを召されることによって、実行します。私たちは、恵みによって救われるということは分かっていますが、神は、私たちの理解をはるかに超えて、ご自分のみむねにしたがって、私たちをキリストのものにすべく、選び、召し出してくださるのです。

²⁴ 月日が満ちて出産の時になった。すると見よ、双子が胎内にいた。²⁵ 最初に出て来た子は、赤くて、全身毛衣のようであった。それで、彼らはその子をエサウと名づけた。²⁶ その後で弟が出て来たが、その手はエサウのかかをつかんでいた。それで、その子はヤコブと名づけられた。イサクは、彼らを生んだとき、六十歳であった。

赤い、毛衣のような赤ん坊が初めに生まれました。赤いというのが、ヘブル語で後に、エドムと呼ばれるようになります。そして、エサウというのは、毛深さを示す言葉になっています。そして、次の出てきた子が、なんと、エサウの足をつかんでいます。その「かかと」というヘブル語から、ヤコブという名になります。「かかをつかむ者」という意味合いです。赤ん坊の時のこの姿が、成人になってからも兄と弟の姿になっていきます。弟が兄に取って代わって、蹴落とすことになります。

²⁷ この子どもたちは成長した。エサウは巧みな狩人、野の人であったが、ヤコブは穏やかな人で、天幕に住んでいた。

ここにおいて、かつてのカインとアベルのような対比があります。エサウは巧みな獵師とありますが、かつて、ニムロデが同じ獵師であり、主に反抗する権力者でありました。

それに対してヤコブは、「穏やかな人」とあります。しかし、この訳は実は「全き人」というものです。かつてノアに対して神が、このような評価をしましたね。ヨブ記にも、潔癖な人、全き人としての言葉として、同じヘブル語が使われています。牧者チャック・スミスが、ヤコブについて悪いイメー

ジをもって説教していたのですが、主が途中でお語りになったそうです。「私は、ヤコブをそのようには見ていない」と。それから、悪くいうのをやめたのですが、そうなのです、ヤコブをことさらに悪い人のように、私たち人間の感覚では見てしまうのですが、主は、ノアやヨブのように、「全き人」としてみなしておられるのです。

「天幕」というのは、いつも女のように天幕の中で給仕しているという意味ではなく、イサクの家業は羊飼いですから、父と同じように羊飼いとて、しっかりと働いていたという意味でしょう。父と母に従順であり、羊飼いとて労していたということだと思います。それに対して、エサウが家を空っぽにし、獵に明け暮れていたというような対比なのです。

²⁸ イサクはエサウを愛していた。獵の獲物を好んでいたからである。しかし、リベカはヤコブを愛していた。

ヤコブとエサウの話は、ヤコブだけに注目しがちですが、ここがイサクの歴史だということを忘れてはいけません。27章には、お家騒動が起こります。それは、イサクがエサウに与えようとした祝福を、ヤコブがエサウのふりをして受け取り、エサウが祝福を受けられなかったという話です。それでイサクが、自分が騙されたことに気づきます。

しかし、元はと言えば、イサクがエサウを愛して、エサウに祝福を与えようとしていたということが問題なのです。それが、イサクに、ヤコブがだまして受け取ったということを通して、神が自分に厳しい教訓を与えられたというところに、神のみこころがあります。主が、ヤコブがエサウよりも強くなり、エサウの子孫、エドム人がヤコブの子孫であるイスラエル人に仕えるようになるというのが、神の予め語られたことです。マラキ書には、神はヤコブを愛して、エサウを憎んだとあります。

そして事実、エサウは野の人となり、家の事はほったらかしにしているのに対して、ヤコブは、真つ当な生活を歩んでいました。ですから、イサクはヤコブを大切にすべきでした。ところが、彼には欠けがありました。「獵の獲物を好んでいた」とあります。私たちは、創世記でずっと、いわゆる完璧な人はおらず、神のみが正しい方であることを見て来ている。ノアもそうですし、アブラハムもそうでした。イサクにも、この欠けがありました。エサウの獵の獲物が好きで、エサウのことが好きだったのです。

しかし、リベカには、主が前もって語っておられました。そのこともあり、リベカはヤコブを愛していました。こうなるとは、家族の中の思惑がばらばらになっていて、それが27章のお家騒動に発展します。しかし、族長であり、父であるイサクが、かしらとして、神ではなく、他のものを好んでいたということが問題だったのです。

²⁹ さて、ヤコブが煮物を煮ていると、エサウが野から帰って来た。彼は疲れきっていた。³⁰ エサウはヤコブに言った。「どうか、その赤いのを、その赤い物を食べさせてくれ。疲れきっているのだ。」それで、彼の名はエドムと呼ばれた。

「赤い」や「血」がヘブル語では、アドムと言います。それで、エドムと呼ばれるようになります。

³¹ するとヤコブは、「今すぐ私に、あなたの長子の権利を売ってください」と言った。³² エサウは、「見てくれ。私は死にそうだ。長子の権利など、私にとって何になろう」と言った。³³ ヤコブが「今すぐ、私に誓ってください」と言ったので、エサウはヤコブに誓った。こうして彼は、自分の長子の権利をヤコブに売った。

これが、まさに先ほどの、生まれてきた時の姿です。ヤコブがエサウのかかとをつかんで出てきたように、エサウが腹が減っていることを使って、彼から長子の権利を奪い取りました。

³⁴ ヤコブがエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えたので、エサウは食べたり飲んだりして、立ち去った。こうしてエサウは長子の権利を侮った。

ヤコブが、いかに狡猾なのかということに目が行ってしまいますが、しかし、聖書は、「こうしてエサウは長子の権利を侮った」というところに目を向けさせています。ヘブル人への手紙に、この出来事の注釈があります。「12:16 また、だれも、一杯の食物と引き替えに自分の長子の権利を売ったエサウのように、淫らな者、俗悪な者にならないようにしなさい。」淫らな者、俗悪な者です。

お腹が空いたとか、そういったたった今の欲求や感覚が一番大事で、大切なこと、永遠にかかわること、高貴なこと、そういったものを、ものの見事に侮るのです。これを、ヘブル書の著者は、淫らとか、俗悪と呼んでいます。

2A 約束の地に留まるイサク 26

ここで、イサクの二人の息子の話は、とりあえず終わります。27章に再び出てきますが、その前に、イサクが、アブラハムに与えられた約束を、そのまましっかりと受け継いだことを証しする、イサク自身の信仰の足跡を見ることができます。

1B ペリシテ人の地での寄留 1-11

1C 約束の地での祝福 1-5

¹ さて、アブラハムの時代にあった先の飢饉とは別に、この国にまた飢饉が起こった。それでイサクは、ゲラルのペリシテ人の王アビメレクのもとへ行った。² 主はイサクに現れて言われた。「エジプトへは下ってはならない。わたしがあなたに告げる地に住みなさい。

アブラハムの時代にあった飢饉とは、12章に書かれていた、アブラハムがエジプトに下って行った時の飢饉です。主が、父のような過ちを犯してはならないと戒めています。

³ あなたはこの地に寄留しなさい。わたしはあなたとともにいて、あなたを祝福する。あなたとあなたの子孫に、わたしがこれらの国々をすべて与える。こうしてわたしは、あなたの父アブラハムに誓った誓いを果たす。⁴ そしてわたしは、あなたの子孫を空の星のように増し加え、あなたの子孫に、これらの国々をみな与える。あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。⁵ これは、アブラハムがわたしの声に聞き従い、わたしの命令と掟とおしえを守って、わたしへの務めを果たしたからである。」

イサクが主に命じられているのは、次のことです。「この地に寄留しなさい」であります。この地に留まっていさえすれば、アブラハムに対する主のあらゆる約束は、イサクのものとなります。主が、アブラハムに、初めに約束を与えられました。12章 1-3節にあります。それから、彼の信仰の歩みにしたがって、少しずつ、その約束を確かなものとされていきました。最後には、イサクを惜しまずに献げようとし、神の命令を守りました。これらのことを、すべて、イサクに神はアブラハムから引き継がせました。イサクはただ、この約束に留まっていさえすれば、すべての祝福は自分のものになるのです。

それが、キリスト者にも与えられている命令なのです。「ガラ 5:1 キリストは、自由を得させるために私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは堅く立って、再び奴隷のくびきを負わされないようにしなさい。」堅く立ちなさい、ということです。パウロは、ガラテヤ人への手紙で、キリストを信じる信仰によって、アブラハムの祝福が異邦人にも与えられていると論じています。そして、キリストにあって、神の相続人になっているとも言っています。これらの約束に、私たちがしっかりと立っていることによって、私たちは自由なのです。

ところが、そこから外れようとする人々がいました。そして、ガラテヤのキリスト者たちが、福音にある自由から離れようしました。それに対して、厳しく警告したのがこの手紙です。与えられた約束を信じて、しっかりと留まることが、私たちに求められています。イサクも同じです。

2C 父の失敗と神の守り 6-11

イサクは、ベエル・ラハイ・ロイというところにいました。ネゲブの中にあります。そこからすぐに東に行き、シュルの道を通ればエジプトですが、主に戒められたので、西に向かい、地中海沿いのペリシテ人の平地に向かいました。そこにゲラルがあります。

⁶ こうしてイサクはゲラルに住んでいたが、⁷ その土地の人々が彼の妻のことを尋ねた。すると彼は「あれは私の妹です」と答えた。この土地の人々がリベカのこと自分自身を殺しはしないかと思っ

「私の妻です」と言うのを恐れたのであった。彼女が美しかったからである。

アブラハムが、エジプトに下った時に犯した過ち、そして、このペリシテ人の地で犯した過ちを、イサクは繰り返しています。妻なのに、妹と偽りました。しかも、アブラハムの場合は、確かに腹違いの妹であり、半分本当だったのですが、イサクの場合は完全な嘘です。

⁸ イサクは長くそこに滞在していた。ある日のこと、ペリシテ人の王アビメレクが窓から見下ろしていると、なんと、イサクがその妻リベカを愛撫しているのが見えた。⁹ アビメレクは、イサクを呼び寄せて言った。「本当のところ、あの女はあなたの妻ではないか。なぜ、あなたは『あれは私の妹です』と言ったのか。」イサクは「彼女のことで殺されはしないかと思ったからです」と答えた。¹⁰ アビメレクは言った。「何ということをしてくれたのか。もう少しで、民の一人があなたの妻と寝て、あなたはわれわれに罪責をもたらすところだった。」¹¹ そこでアビメレクは、すべての民に命じて言った。「この人と、この人の妻に触れる者は、必ず殺される。」

主が、イサクとリベカを守られましたが、これも同じです。違いは、アビメレクはリベカを、自分の妻に召し入れることはありませんでした。けれども、民の中で妻にしたいという者たちは、いたようです。そして、父と同じように、異教徒の王から叱責を受けています。

アブラハムの生涯で、清濁併せ呑むような信仰であることを知りましたが、イサクも同じです。イサクの場合は、父の影響がとても強く、父の過ちを自分自身も繰り返してしまっています。主はモーセに、「父の咎を子に」と言われています(出エジ 34:7)。これは決して、親の罪が子に遺伝するような呪いやたたりではありません。そうではなく、父の犯した罪は、子も影響を受けて、同じことをしてしまう傾向があるということです。エゼキエルの預言には、親がたとえ罪を犯しても、子は正しいことを行っていれば、父のしていることが子に問われることはない、犯した本人がその対価を支払う、ということが書かれています。

2B 井戸の争い 12-33

しかし、次は、イサクの信仰の勝利の話です。

1C 祝福への妬み 12-16

¹² イサクはその地に種を蒔き、その年に百倍の収穫を見た。主は彼を祝福された。

すばらしいです、主は真実な方です。ただ、この地に寄留しなさいという命令を出されて、イサクがそれに従っていたので、そこで主は祝福し、百倍の収穫を得させました。百倍と言えば、イエスご自身の喩えで、良い土地に落ちた種は、三十倍、六十倍、百倍の実を結ばせると約束されましたね。主が、それをお語りになったのは、イサクに対する主の真実を思っただけのことかもしれません。

このように、主は、約束にしっかりと、信仰をもって留まっていれば、必ず祝福してくださいます。

¹³ こうして、この人は富み、ますます栄えて、非常に裕福になった。¹⁴ 彼が羊の群れや牛の群れ、それに多くのしもべを持つようになったので、ペリシテ人は彼をねたんだ。

祝福に対して、人の罪はそれを妬むようにさせます。私たちにも、キリストにあって祝福されると、それを見て、自分にはないので妬む人々が出てきます。

¹⁵ それでペリシテ人は、イサクの父アブラハムの時代に父のしもべたちが掘った井戸を、すべてふさいで土で満たした。¹⁶ アビメレクはイサクに言った。「さあ、われわれのところから出て行ってほしい。われわれより、はるかに強くなったから。」

覚えていますか、ペリシテのアビメレクに対して、アブラハムは抗議しました。自分の掘った井戸を、アビメレクのしもべたちが奪い取っていたからです。それで、その井戸がアブラハムの所有なのだということを、七匹の子羊をとって誓わせました。しかし、ここで妬みから、この誓いを破って、アブラハムの井戸を全て土でふさいでしまいました。そして追い出したのです。

2C 主への信頼と忍耐 17-25

しかし、ここからイサクは、信仰を働かせます。彼は、その性格もあってか、争うことはしません。この不条理に対して、立ち向かいません。しかし、それでも井戸を掘るという決断をしたのです。

¹⁷ イサクはそこを去り、ゲラルの谷間に天幕を張って、そこに住んだ。¹⁸ イサクは、彼の父アブラハムの時代に掘られて、アブラハムの死後にペリシテ人がふさいだ井戸を掘り返した。イサクは、それらに父がつけていた名と同じ名をつけた。

すでに、ペリシテ人たちは、アブラハムが死んだら、その誓いを破っていたようです。井戸を塞いでいました。けれども、それは誓いですから、イサクの所有なのです。所有権のある井戸を掘り返しました。

¹⁹ イサクのしもべたちがその谷間を掘っているとき、そこに湧き水の井戸を見つけた。

すばらしいです、主は真実な方です、湧き水を出させてくださっています。

²⁰ ゲラルの羊飼いたちは「この水はわれわれのものだ」と言って、イサクの羊飼いたちと争った。それで、イサクはその井戸の名をエセクと呼んだ。彼らがイサクと争ったからである。

エセクとは、「アサク」という争う意味のヘブル語からの名前です。水が出たら、それを奪い取ります。妬みは、奪い取ることだけです。主につながっている時に、初めてそこから、いのちが生まれます。妬みは、主に愛され、主につながっていないので、つながっている人に触れると、それをうらやみ、そして奪い取ります。

²¹しもべたちは、もう一つの井戸を掘った。それについても彼らが争ったので、その名をシテナと呼んだ。

「シテナ」は、「敵意」という意味です。ペリシテ人は、この井戸についても争ってきたからです。その敵意は強いことを実感して、付けたのでしょう。

²² イサクはそこから移って、もう一つの井戸を掘った。その井戸については争いがなかったので、その名をレホボテと呼んだ。そして彼は言った。「今や、主は私たちに広い所を与えて、この地で私たちが増えるようにしてくださった。」

ここです。イサクは、あきらめなかったのです。ペリシテ人の不条理なふるまいは、いい加減にしてほしいと思うところですが、それにもめげず、イサクは掘り続けました。彼の姿は、詩篇 37 篇にある、悪に対する数ある慰めの言葉です。「詩 37:1-4 悪を行う者に腹を立てるな。不正を行う者にねたみを起こすな。2 彼らは草のようにたちまちおれ青草のように枯れるのだから。3 【主】に信頼し善を行え。地に住み誠実を養え。4 【主】を自らの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。」地に住むのです。つまり、悪や不正を行うところには、空論が多いです。だから、しおれて、枯れます。地に足を置きます。そして誠実を養います。誠実の種を植えて、それを育てます。そうすれば、必ず、主から与えられた願いはかなえられるのです。

「レホボテ」は、「広い所」という意味です。これは、妨げられることなく、制限されるところがなく、自由にいられるということを意味しています。

²³ 彼はそこからベエル・シェバに上った。

そうです、ここで父アブラハムは、永遠の神、主の御名を呼び求めました。(21:33)イサクは、主の真実を見て、井戸の事で誓いを立てた、このベエル・シェバのところに上って来たのです。

²⁴ 主はその夜、彼に現れて言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神である。恐れてはならない。わたしがあなたとともにいるからだ。わたしはあなたを祝福し、あなたの子孫を増し加える。わたしのしもべアブラハムのゆえに。」²⁵ イサクはそこに祭壇を築き、主の御名を呼び求めた。彼はそこに天幕を張り、イサクのしもべたちは、そこに井戸を掘った。

確かに、主が語ってくださいました。いろいろな争いがありましたから、恐れていたのでしょう。主が、「恐れてはならない。わたしがあなたとともにいるからだ」と言ってくださっています。そして、父がしたのと同じように、主の御名を呼び求めています。それから、しもべたちが、改めて井戸を掘っています。

3C 誓いの井戸 26-33

²⁶ さて、アビメレクがゲラルからイサクのところにやって来た。友人のアフザテと、その軍の長ピコルも一緒であった。

かつて、アビメレクはアブラハムののちろに行き、同じように軍の長ピコを連れてきて、誓いを立ててくれるよう頼みに来ました。ちなみに、アビメレクもピコも、職の名称であって、人の名前ではありません。

²⁷ イサクは彼らに言った。「なぜ、あなたがたは私ののちろに来たのですか。私を憎んで、自分たちののちろから私を追い出したのに。」

これは、イサクの偽らざる思いでしょう。なんで今更、来るんですか？憎んで、追い出したのに？ということです。

²⁸ 彼らは言った。「私たちは、主があなたとともにおられることを確かに見ました。ですから、こう言います。どうか私たちの間で、私たちとあなたとの間で、誓いを立ててください。あなたと盟約を結びたいのです。²⁹ 私たちがあなたに手出しをせず、ただ良いことだけをして、平和のうちにあなたを送り出したように、あなたも私たちに害を加えないという盟約です。あなたは今、主に祝福されています。」

アブラハムに対しての時と同じですね。主がともにおられるのです。それで、自分たちが害を受けないようにしたいという思いから盟約を結んでほしいとお願いしています。彼らが、「平和のうちにあなたを送り出したように」というのは、偽りで、争って追い出したのです。けれども、彼らは確かに、神がイサクに言われたことを確認する発言をしています。主がともにおられて、また、祝福されているということです。ですから、イサクとしては、主からの確認を得たことでしょう。

³⁰ そこでイサクは彼らのために宴会を催し、食べたり飲んだりした。³¹ 翌朝早く、両者は互いに誓いを交わした。イサクは彼らを送り出し、彼らは平和のうちに彼ののちろから去って行った。

イサクは、ここで大いにほめられるべき決断をしています。争うのではなく、平和を選びました。宴会は、そのしるしです。そして誓いをしています。自分に関する事は、平和を持つようにという

ことを、ロマ 12 章に書かれています。

³² ちょうどその日、イサクのしもべたちが帰って来て、自分たちが掘り当てた井戸のことについて告げた。「私どもは水を見つけました。」³³ そこでイサクは、その井戸をシブアと呼んだ。それゆえ、その町の名は、今日に至るまで、ベエル・シェバという。

ベエル・シェバに来て掘り始めた井戸がありましたね。そこから水が湧き出ました。それで、その井戸を、改めて「誓い」を意味する、シブアと名づけます。そして、父が名づけたのと同じ名を、その町に改めて付けます。ベエル・シェバです。誓いの井戸です。

3B 俗悪エサウの悩みの種 34-35

こうして、イサクの生涯で、確かにアブラハムの祝福を受け継いだことを見ました。話は、息子たちのことに戻ります。

³⁴ エサウは四十歳になって、ヒッタイト人ベエリの娘ユデイトと、ヒッタイト人エロンの娘バセマテを妻に迎えた。³⁵ 彼女たちは、イサクとリベカにとって悩みの種となった。

エサウが、俗悪な者であることを先に知りましたが、ほとんど自分の肉欲でヒッタイト人の娘を妻に迎えていると思われます。淫らな男です。しかし、イスラエルの神を全く敬わない女たちで、家にも問題を引き起こし、親にとって悩みの種となっていました。そして、この不満がリベカの心に募っていきます。次の章、27 章で、リベカが、ヤコブにエサウのふりをさせた張本人です。しかし、それはヒッタイト人の娘たちのことが、うんざりしていたからです。